

お釈迦さんは、説法があった次の日の朝早く、お弟子さんもまだ寝ているうちに起き上がって出掛けるんですね。

「何をされるのだろう」と、お弟子さんが見ていた。

そうしたら、自分が前の晩に説法した処をズーツと回る訳ですよ。

「何故、回られるのだろう」と見ていたら、その灯りに集まった虫が、火に飛び込んで死んでしまうんですね。その虫を弔っていらした訳ですよ。

お釈迦さんでさえ、そういう事をちゃんとしていらつしやる訳ですよ。

そういうものを見てみると、その辺にいる虫も踏む訳にいかなくなってきましたね。虫でも魂がある。植物にも、実はある訳ですね。話もする。

二四、植物の精——人間の心を知っている草木や花達

これも、以前に話した事があると思いますが、私は、前によく山に行っていた。そ

の時には、山の中にある家を借りて、一人で反省をしに行っただけですけどもね。

その場所は、山の裾から少し登っていった山間に、谷川が流れている処があるんです。ザーツと物凄い音がして、とても綺麗な水なんですよ。そこに行っただけですね。

そして、その谷川に橋が架かっていて、その袂に大きな木があるんです。

「あつ、こんな処に木があつて大丈夫かな」と思いながら、橋を渡ったんですよ。

そして、山の方に行こうと歩き始めたんですよ。そうしたら、何かが私を呼ぶんですよ。誰もいないのに、声が聴こえる。しかも、その呼んでる人は女の人なんですよ。「もうけたつ」とは思わなかったですけどもね（笑）、女の人と呼ぶ訳ですよ。

見ても誰もいないんですよ。何だか気持ち悪くなって……。

辺りはシーンとしていて、土の匂いがして、たまに鳥が飛んでいるぐらいで、後は蟬がジージー鳴いているだけなんですよ。

不思議に思いながら、そしてまた行こうとしたら、また呼ぶんですよ。今度は、ズーツとその辺りをよく観てみた。そうしたら、その橋の袂の木が、今、花で真っ盛りなんですよ、物凄く綺麗な花が咲いているんですね。実は、その木の精が呼んでい

た訳なんですよ。

「えっ、花が喋るのは知ってたけど、木も喋るんだ」——同じですよね、そんなもの……。(笑) 私は、吃驚しましたよね……。

「これは、一体どうなったんだろう？ 私、変になったのかな」と思いましたよ。

それで、私に挨拶をしている訳ですよ。挨拶したから、私も挨拶しますよね。(笑) そうして、話をするんですね。それがきちんと聴こえてくる訳ですよ。しかも、それは人間の事を物凄く批判をしている言葉なんですね。丁寧な言葉なんですけれど、人間を批判している訳ですよ。そして、

「あなた、一体、何しに来たんですか？」

と、こういう事なんです。

ところが、私がこれからやろうとしている事は、もう分かっているんですよ、次元が違うんですから——。

「あなた、こういう事でいらっしやっただけでも、本当に大変ですね。あなた、自分の事、よく知ろうと思つて来ましたね」

と、ちゃんと知つているんですよ。それから、いろんな話をしたんですね。最後に、「あなた達は、何処にでも行ける。本当に羨ましいですね。」

わたし達はここから動けないですよ。

しかし動けなくても、自然の中には、いろんなものがあつて、それを調和する為に、わたし達はわたし達なりに一所懸命、心の浄化を図っているんですよ。

あなた達人間はね、しっかりしなくてはいけないんじゃないでしょうか。

そうしてくれないと、わたし達は非常に困るんですよ」

——いやもう、言われましたね……。

山の中の一本の木ですから、何も関係無いように思いますね。地球の中の、たった一本の木ですから、あまりピンとこないですね。

しかし、その木は自然のものを代表して言っているんじゃないでしょうか。

その時の事を、またズーッと考えていると、それこそメルヘンっていうの？ 童話の世界に入ったみたいですね。その中で私も話してる訳ですよ。

それから私は、木が喋るといふ事が分かった訳ですよ。

「ところで、木が日本語で喋ってくれますか？」と、こうなってきましたよね。(笑)——そうじゃないですよ。木が喋っていても、これは心の中の事ですからね、ちゃんと途中で(この世的に言う)通訳する機械みたいなものがあって、分かる訳ですよ。心の世界というのは素晴らしいんですよ。

それで、自分がその山を引き払う時に、気になってもう一回行って見たんですね。そうしたら、また話をするんですね、

「都会に帰ったら頑張ってくださいよ。さようなら……」

って手を振るんですね。私はそれを見た時に、本当に自分も、こちらから自然にサヨウナラと手を振ってましたね。

その精は、人間のような格好をしているんですよ。それは何故かと言いますと、彼等もまた、人間になりたいものを持っているんですね……。

これは、そこだけ次元が変わってしまったんでしょうね、おそらくこれは——。

こんな事を人に言っても、誰も本気にしてくれませんね。くれませんよ、「そうですね」なんて言う人はいませんよ。これは、私の世界で起きた事ですね。

普通に見たら、木にただ花が咲いているだけでしよう。それが喋って人間のような格好をして出て来るんです。これは何だか、子供達に話を聴かせたいくらいですね。

やはりね、そういうものが、私達の周囲には沢山あるということなんですよ。ただ、分かるか、分からないかだけなんです。

これは何故、私がそうなったのかは、さっぱり分かりませんよ。

私達が子供の頃見る、あのイソップ物語やアンデルセンの童話にしても、あれは大人が何回も読んでみた方が良いでしょう。素晴らしい事が書いてありますよ。本当は、あれが私達の本当の世界でしょうね。

そうすると、やたらにポキンなんて出来なくなってしまう。ですから私は、庭の木の枝を切る時には、

「切らないと、根元の方がダメになっちゃうから、先っちょの方よ、ご免なさいね」

と、そう言って切る。草一つ抜くのも、本当はね、「ご免なさい」と、それくらい気持ちが悪ければいけないですね。

そんな事をやっている、今度は蚊が飛んで来ても、蚊も叩けない。新聞紙か何か

持ってきて、「外へ出てけー」ってやってしまいますよね。(笑)

人間というのは、そうなるんじゃないでしょうか。どんなに小さな生き物でもそうですね、みんな人間の為になっている訳ですよ。必要があるから何でもいるんですよ。必要で無いものはいないんですよ。

——次回に続く

次回『二五、身を滅ぼす文明——自分の身の回りの知らない事』の小見出しページ
公開予定は、6月の第5週目です。どうぞお楽しみに。